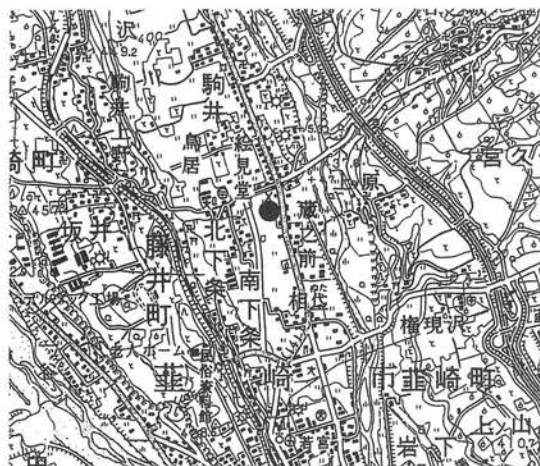


3. 上横屋遺跡

所在地 韮崎市藤井町北下条字上横屋506-1外
調査原因 民間開発
調査期間 1998年9月21日～1999年1月14日
調査面積 約900m²
調査主体 韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
担当者 関間俊明 秋山圭子



遺跡の概要

上横屋遺跡は、塩川右岸の河岸段丘上に位置し、標高は約377mをはかる。国道141号線をはさんで向かいには、そう距離をおかず塩川の流れがあり、広大な段丘の河川寄りの場所に立地する。通称藤井平と呼ばれるこの段丘は、現在、広大な水田地帯となっている。この肥沃な土地では、古来より人々の生活が活発に営まれており、上横屋遺跡周辺だけでも、後田堂ノ前遺跡（弥生・古墳後期・奈良・平安時代）、後田第2遺跡・坂井堂ノ前遺跡（古墳時代後期）、三宮地遺跡（縄文晩期・平安時代）、火雨塚遺跡（古墳時代）など、古墳時代・平安時代を中心に遺跡が群在している。こうしたなか上横屋遺跡では、弥生時代～平安時代の竪穴住居跡30軒（弥生時代6軒、古墳時代後期18軒、奈良時代2軒、平安時代2軒、時期不明2軒）、掘立柱建物跡3棟、土坑、畝状遺構、溝、溝状遺構が検出された。

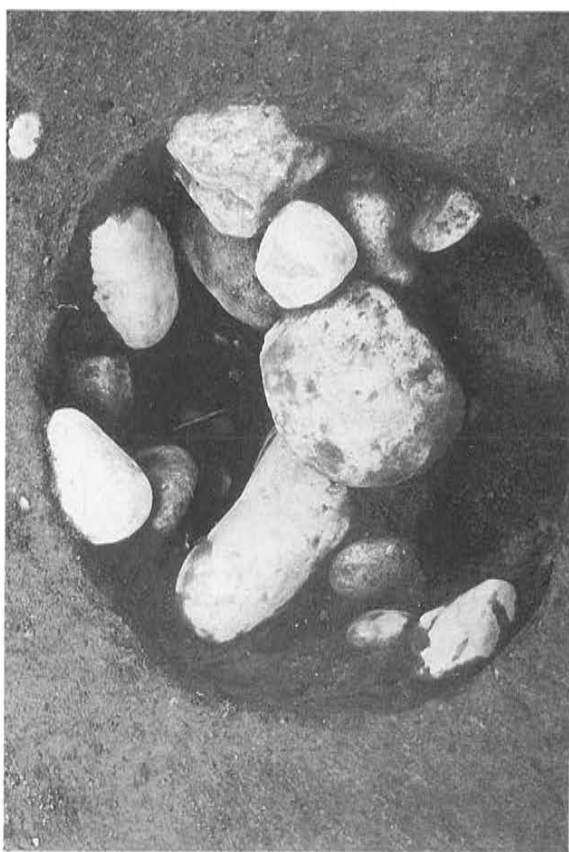
古墳時代後期の住居跡は、各々個性的なカマドを持ち、該期のカマドの多様性を伺うことができる。また、16号住居跡では、覆土中に2面にわたって礫が敷き詰められている。その間層は漆黒の粘質土層で、骨片が多く含まれていた。上下層の間での大きな時期差は見られず、住居廃絶後の2次利用の様子が想定される。また、22号住居跡からは須恵器の長頸壺が出土するなど、該期の一般的な遺跡のあり方とは異質な特徴をみせている。

またこの時期の遺物として青銅製耳環2点、腕輪1点が出土している。耳環は、1号住居跡（古墳時代後期）北東端の覆土上層から出土した。2点は大きさも重さも異なり、20cmほど離れて出土している。いずれも表面にわずかに金メッキが残っている。また腕輪は1号住居跡の南、B3グリッド1号土坑から出土した。青銅製のきわめて細い棒状の素材を面取りしてから作られている。これらの遺物は市内ではこれまでに出土例がなく、今回が初めての出土となる。

遺跡は、市内ではまだ発見例の少ない古墳時代後期の遺跡で、該期の遺物編年研究、遺跡領域研究の上で重要な遺跡となろう。（秋山）



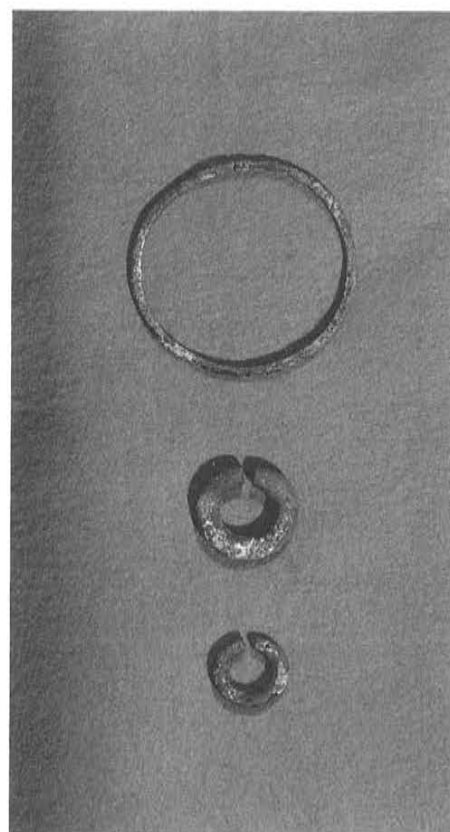
上横屋遺跡遺構配置図



C 3 SD-1



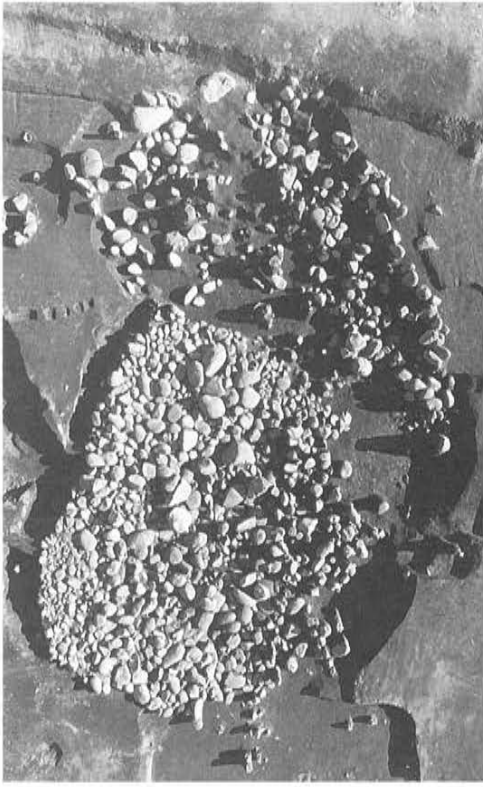
C 3 SD-1 腕輪出土状況



耳環・腕輪



14号・16号住居（第一礫面）



14号・16号住居跡（第二礫面）



B3 SD-1 遺物出土状況



B3 SD-1 遺物アッブ